

2015年12月22日

中野区長 田中大輔 様

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 上浪 寛
同 保存問題委員会 委員長 安達文宏
同 中野地域会 代表 小西敏正

旧豊多摩監獄正門の保存に関する要望書

謹啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴区におかれましては、野方配水塔を文化財に登録される等々、文化全般について深いご理解を示され、弊会としてここに敬意を表します。

さて、中野区新井3丁目にある法務省矯正研修所東京支所が、昭島への移転する予定であり、移転先の工事も進んでいると聞き及んでおります。

東京支所の現在の敷地は、旧豊多摩監獄（後の中野刑務所）の跡地の南半分に当たり、ここに1915（大正4）年の刑務所開設当初からの煉瓦造の正門（表門）が現存します。1983（昭和58）年に刑務所が廃止されるに際しての日本建築学会からの要望などにより、この正門だけが刑務所の解体から外され、今日まで非常に良い状態で保存されています。

我が国における煉瓦造建築の中でも最も高い水準にあったと言われる旧豊多摩監獄は、旧司法省に在籍した建築家 後藤慶二によるものですが、後藤は満35歳の若さで他界したため、この正門が彼の唯一の現存作品となっています。

後藤は1906（明治39）年に東京帝国大学建築学科を卒業後すぐに司法省に入り、営繕技師としてこの監獄の建設に1915年まで専従し、監獄という冷徹な機能に忠実に従いながらもこれに深い空間性を与え、そのストイックな外観にロマンチックとさえ言える表情を与えています。工事現場にも繁く通り詰めて、囚人たちの焼いた煉瓦を、類を見ない密度の高い作品へと昇華させました。

残された正門は、小品ながらも煉瓦の積み方に及ぶディテールの全てに後藤の細やかな配慮が込められ、外観の造形的バランスの妙とともに、かつて存在した旧豊多摩監獄という作品の水準の高さと、後藤自身の並々ならぬ熱意とを如実に証言しており、日本の近代建築史にとって、最も重要な遺産の一つと言って過言ではないでしょう。

また、中野区の郷土史を考える際にも、他の多くの遺産が失われてきた中で、この正門は、東京市が震災後に郊外へと様々な機能を移転させるに際し中野が受け入れた「迷惑施設」の記憶として、あるいは政治犯・思想犯の収容施設という、特異な時代の証言者として、中野のまちが過去との連続を確保するために、たいへん貴重なものです。

以上のように、その建築的・文化的価値の重要性・希少性に鑑み、矯正研修所東京支所の機能移転に際しては、ぜひともこの旧豊多摩監獄正門を譲り受けて貴区がこれを保存活用されますよう、最大限のご配慮を賜りたく、ここにお願いする次第です。

なお、日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会、同 中野地域会といたしまして、公益社団法人として可能な協力をさせていただきたいと存じます。

敬白